



1992 年(平成 4 年)

11 月号 (No. 570)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- ナムチャバルワ第七信……………(1)
 海外の山……………(2)
 「東チベットからの朗報」
 再びナムチャバルワへ
 ……山田二郎…(3)
 橋本龍太郎名誉総隊長、ナムチャBC
 訪問……………(3)
 新・山研だより(4)……………(3)
 追悼 故・高本信子さんへ
 ……佐藤知恵子…(4)
 東西南北……………(5)
 「樺太の山突岨山」「2400メートル級
 の山」「ポーランド岳人消息」ほか
 図書紹介……………(8)
 「日本旅行日記1」「ヒマラヤ冒険物
 語」「早池峰山の四季」ほか
 自然保護随想……………(9)
 報告……………(13)
 「青年部阿尼瑪瑪峰遠征報告」「1992
 ・9・12 サタデープラン」「名誉会員
 を囲む会」ほか
 会務報告……………(15)
 「9月定例理事会」「ルーム日誌」
 「会員異動」「山研・ナムチャ合同
 募金応募状況」「新入会員(復活)」
 「住所・住居表示変更」
 お知らせ……………(17)
 書籍・雑誌受入報告……………(19)

ナムチャバルワ第七信

ほぼ予定通り、登頂態勢へ

九月十四日にはベースキャンプ開き
 を行い、いよいよ登山開始の実感を得
 ました。

昨年よりも約一カ月早いベースカ
 ンプ入りのため、周辺は緑が多く、爽
 やかな雰囲気です。

キャンプ1までの樹林帯、キャンプ
 2までの草原にも可憐な高山植物が咲
 きみだれ、小型のヒョーモン蝶が舞い、
 驚いたことは、時折りの暑い日差しに
 蟬が鳴き出した時でした。キャンプ2

速報!!

ナムチャバルワ峰初登頂に成功(十月三十日)

(詳細は次号に)

への谷に入るとブルーポピーのケシ坊
 主が見られ、六、七月頃にはきつと素
 晴らしい花園であったことをうかがわ
 せます。ダイオウ、雪蓮もあちこちに
 生息しています。

キャンプ2は昨年と同様の状態で、
 心配された故大西隊員のケルンも、ラ
 バロを望む場所に静かに建っていました。
 キャンプ2には大小十四のテント
 が張られ、あたかも夏の涸沢や剣沢を
 思わせる景観です。

今年は、モンスーンの開始が例年よ
 り約一カ月も遅れたせいか、ラバロを
 はじめとして周辺も雪が少ない。

十八日にラバロのルート工作が行わ
 れ、フィックスザイル十四本を張りま
 したが、核心部には沢床が見えるくら
 い雪が少なく、一九八四年(三、五月)
 中国隊のフィックスザイルを時に見る
 ことがあります。

何回かの荷上げの末、二十三日には
 昨年より少し上部の標高五六〇〇m地
 点にキャンプ3を建設しました。

また、二十四日にはテントサイトに
 「気象ロボット」を設置しました(お
 そらく、世界最高所だと思えます)。
 このロボット君が、二十四時間、気温
 ・気圧・風向・風速を記録していて、
 ベースキャンプでその全てのデータ
 を電波を通して収集することができま
 す。

ロボットを設置した私は、梶田マネー
 ジャーと共に、名誉総隊長の一行を
 迎えるためベースキャンプに降りまし
 た。

夕刻、現地に到着された橋本龍太郎
 名誉総隊長他三名は、長旅の疲れも見
 せず、元気で、周辺の景観、接地当
 の村の訪問等、楽しんでいただけたこ
 とと思います。また、中国側総指揮部
 との打ち合わせも、友好的に終了しま
 した。

二十七日に名誉総隊長隊を見送り、
 いよいよ第二期の登山活動を再開しま
 した。降雪のため、キャンプ4の建設、
 キャンプ5へのルート工作、荷上げ等
 が二日遅れではありますが、日中双方
 の隊員、中国の高所協力員の努力に
 よって進められました。

しかし、十月六日、キャンプ5への
 荷上げの帰り道、昨年度大西隊員が遭難

▶日本山岳会事務取扱時間
 月、火、木、土曜 10時~20時
 水、金曜 13時~20時
 日曜・祭日は休み
 ▶図書室開室時間
 日曜・祭日・月曜を除く毎日
 13時~20時

お知らせテラップ電話

3234 六六五九

また特筆すべき
 ことは、深さの異
 なる二点の雪温を
 計測し、その温度
 勾配によって雪崩
 の発生原因である
 「しもざらめ雪」
 の形成を予知でき
 ることです。気象

した同じ地点で、下降中の中国隊員三名が雪崩に巻き込まれました。幸い、自力で脱出し、事無きを得ましたが、やはり怖い所です。

七日には、一日にベースキャンプ入りをしていた山田総隊長、斎藤副総隊長、中国側ローサンダワ総隊長の総指揮部をキャンプに迎え、八日、登頂隊員の発表、故大西隊員の墓参りを行いました。

今年は天候にも恵まれ、ほぼ予定通りの進行状況です。これには、気象ロボット、気象衛星ノアの受像、日本気象協会からの予報および気象担当の飯田隊員の陰の努力があります。

九日、第一次登頂隊員がキャンプ2を出発。予定通り進められれば、十五日、十六日とナムチャバルワ峰の初登頂を果たすことができるはずで

第一次登頂隊員

日本側 山本一夫・青田浩・山本篤
中国側 ジャブー・ツェリンドルジェ

・ペンバザシ

第二次登頂隊員

日本側 重廣恒夫・三谷統一郎・佐藤正倫

中国側 サンズー・ダーチミ・ダチヨン
(十月九日 キャンプ2にて
重廣恒夫 記)

海外の山

東チベットからの朗報

未踏峰ナムチャバルワ(七七八二呎)は、日中合同隊により、ついに登られた。

今年は、日本人宇宙飛行士による空からの授業が話題になったが、文明、とくにコミュニケーション技術の発達とは、つくづく凄いものだ。私も東チベットの山の雰囲気を知りたくて、少しその恩恵に預かった。

十一月二日夜、ベースキャンプの通信テントには、飛び抜け明るい山男たちの声が響いていた。

「ビバークの夜は、マイナス三十度ぐらいに冷えましてから、眠るなんてできなかったですね。頂上ですか？そう、意外に広いですよ。えっ、キャッチボール？うーん、ぎりぎりやればできる広さですねえ」

答えてくれたのは、第一次隊の一人、青田宏である。船舶向けに開発されたインマルサット・システムというありがたい通信方法のおかげで、私は東京の自宅でその声を聞くことができたのだ。

一、二次隊あわせて十一人(日本人五人、中国六人)いづれもチベット族)登頂の成果をあげた隊員たちは、この日ベースまで下りてきたばかりだった。久々に会った仲間たちと、昨年雪崩で死んだ元気者の大西宏を偲びつつ乾杯を上げたのである。

最後のロックバンドを越えたところに巨大なセラック群があった。高さ二、三十呎、いやもっと大きかったともいう。「ナムチャバルワ氷河の真の源頭かもしれない」

と、三年間この山に取り組んだベテランカメラマンの鯨坂青青は、言った。

第一次隊の六人は、このセラック帯でビバークした。「互にくっついてじっと朝を待った」のだ。

十月三十日午後零時九分、登頂。幅五呎、長さ二十呎ほどの、広い、平らな頂きだった。午後二時三十分、一次隊が固定したザイルをたどって二次隊の五人も登頂。こちらは、ビバークなしの攻撃だった。

二次隊の重広恒夫・日本隊長は、七千二百呎地点で断念し、ザイルを最上部工作のため回収させた。全員登頂はならなかったが、清々しい決断であったと思う。

昨年の経験から、ナムチャバルワ登頂の決め手は、天候の判断、とこの隊は考え、気象専門の隊員を加えた。それが見事効を奏したようである。アタック体制に入ってから二度も、悪天候でチャンスをつぶされたが、モンズーン明けの切れ目の好天をつかんで一挙に成功させたのだった。

撤収にあたって重広隊長は、中国側責任者、協力員たちと第二キャンプに残った。「山を汚さない」が、この隊の合言葉であり、何も残したくない、と考えたのだ。「ベースでも、毎日掃除。タバコの吸殻捨てたら怒られる」と鯨坂が考えてくれた。

詳しいことは、隊員たち自身の言葉でいずれ報告される。一九八四年、中国隊の初挑戦以来、頂きを踏まなかった世界で一番高い未踏の山が、究められたことは、この年最大の成果と言っていいだろう。

これで、ブータンのガンケンブンスム(七五四一呎)が、未踏の最高峰となった。

(江本嘉伸)

海外の山

再びナムチャバルワへ

日中合同登山隊

日本側総隊長 山田 二郎

九月二十三日東京を発った山田、斎藤は、北京で中国側副総隊長王鳳桐氏を加え、成都、ラサを経由、十月一日ベース・キャンプに登って来ました。

新・山研だより(4)

九月二十八日 快晴、朝気温零度冬化粧目前の穂高の山々は美しかった。

山研は屋根もふかれ、十人近い人たちが立ち働いていた。ちょうど正面階段、一階テラス部分の石張りをしていた。二十五ミリの厚のミカゲ石だ。

ハシゴを使って初めて二階に上ってみた。

前山研は木々に囲まれ、山々を見ることが出来なかった。おどろいたことに六百山が眼前に見え、目を左にうつすと、明神最南峰が見える。

屋内は風呂がすえつけられ、配管も進んでいる。十月二十日ごろには外板も張り終る予定である。

会報が皆様に届くころには、新山研はほぼ完成していることだろう。

(小倉茂暉・溝口洋三)

途中ラサでは帰国の途にある橋本名誉総隊長と交流、また山本(朋)氏を隊長とする立教大学OB隊とも偶然の出会いを持ちました。日本山岳会の活動も多岐に亘ることを痛感した次第。

ラサとBC間の二日かかりの悪路ドライブは慣れたせいか幾分楽でした。今年のモンスーンの降水は例年に比べ少いそうで、途中二ヶ所程の渡渉(と言っても車に乗ったまま)も大したことなく、十月一日BC入り、ここでは中国側総隊長のローザンダワ氏をはじめ、登山隊の小島、飯田両隊員、報道隊の鯉坂隊長ほかの歓迎を受けBC入りを果たしました。

登山隊本隊はC2以上で第一ステージ展開中で重廣隊長以下全員不在。天候の合い間をぬってこの時既にナイプン直下のC5迄のルート開拓を終え、日中両隊員は見事なチームワークで着々態勢を整えている最中でした。

ラサの気象台は「今年のモンスーンは明けた」と言うものの当地で見限られ、昨年と余り変わらぬ不安定な天気が続いています。ただ今年は飯田隊員が各種機器を駆使して気象情報を集め、日本の気象協会の助けを得て気象分析と予報をしてくれている点、昨年に比べると大いに違って心強い限りです。

隊員は前述の活動でお判りの通り、

昨年と違って事故はもちろん怪我もなく、小島ドクターは手持ちぶさたで、梶田隊員不在のBC村長兼務と言った有様です。

斎藤ドクターと小生も次第にBC生活に慣れ、来るべき最終ステージに備えています。

BCにある総指揮部は日中ともこの一兩日中にはC2に登り、第一ステージを終え、C2に戻った隊を迎え、九日頃からの第二ステージ(登頂態勢)に向う隊員の出発を激励見送った後、BCに戻り、十月中旬の登頂を見守ることになります。今年は時間の余裕もあり、全隊員の士気も高く、慎重を期しながらも登頂の意欲充分です。今年こそ皆様に登頂の朗報をお届けすべく張切っておりますので大いなるご声援をお願い致します。

橋本龍太郎名誉総隊長、ナムチャBCを訪問

(十月五日 BCより)

隊編成 橋本龍太郎名誉総隊長、ドクター長尾悌夫、湯浅道男、橋本清

橋本清

期日 九月二十一日より十月三日予備一日

九月二十一日 十時二十分 ANA

便にて成田発。北京では季夢華、史占春主席等多数の出迎えを受ける。宿泊地・長富宮飯店。中国登山協会による夕食会が行われる。日本側四名に中国側 季夢華、史占春、王楓桐、曾曙生、許競、王振華が出席。史占春も病気が快気したのか、非常になごやかな夕食となる。

九月二十二日 SZ九時五十分、北京発、成都に向う。成都では四川登山

追悼

故・高本信子さんへ

佐藤知恵子

高校時代陸上をなさっていたあなたが山登りを始めたのは、毎日映画社でフィルム編集を覚えようとはげんでいた十九歳の頃。ハイキングから始めて、その後東京青峰山岳会、同人ユングフラウに入会され、オールラウンドな山行を多くなされたようです。

初めての海外登山はキリマンジャロだったようですが、より多くの海外での山登りを目指すようになったのは、一九七三年、日本山岳会に入会してからではないでしょうか。

一九七六年のアビガミンを最初に、もう毎年のごとく海外でのいろいろな高峰登山を実行していらっしやいました。最近、アジアの山がおもしろい

協会副主席于女史と担当の王華山さんが出迎えに来ていた。成都では錦江飯店に泊る。

九月二十三日 早朝五時出発と、いつもラサ便は早い。成都双流空港で朝食のうどんを摂り夜の明けた双流空港を後にラサへ、ラサ・クンガ空港ではチベット登山協会の高さん等の出迎えを受ける。宿泊はラサ賓館である。ラサ賓館は整備された事が一つあつ

とインドネシアや台湾などの山へも出かけ、次の計画も練っていたようです。私があなたと知りあえたのは一九八〇年の婦人懇談会によるケダルナート登山のとき。私にとって初めての海外遠征で、やはり初めての隊長役であつたあなたの指導のもと、何の不安を感じることなく楽しく気持ち良い山登りができたことにとっても感謝しています。

いくつかの海外登山を一緒にしたなかで印象に残るのは、ある食事の時の事。羊の脳味噌の変わった料理が出て、しるる男性陣を尻目に一番先に手をつけたのは、高本さんあなたでした。山研、婦懇の理事として四年間の大任を果たされたこともあり、女性懇談会のお便り係もなさっていました。

また、写真はすばらしい腕前で、「山と溪谷」などにも掲載されていたこと

た。各部屋に酸素が設備される。高地に泊る人にとっては、非常な安心感だ。夜はチベット登山協会による夕食会が。夕食会にはチベット自治区主席も出席され、日中合同ナムチャバルワ登山、日本とチベットの交流を祝う乾盃を。意義深い夕食会となる。

九月二十四日 九時十分出発。いよいよ陸路、八一鎮。八一鎮迄はラサより東へ。ラサ川を三時間ほど逆登り、

は皆様もご存じのことと思います。

「岩と雪」の編集部に転職し、その合間に旅行会社の山岳ツアーの添乗をされていたが、英語が堪能で山の知識も豊富、いつも沈着冷静で怒った顔を見ることがない高本さんでしたから、それは適任の仕事だったように思います。

今回、もし事故にあわなければ、チョ・オユーとシシャパンマの二峰連続登山にのぞんでいたはず。奇しくも故・小原勝郎さんと同じお寺に眠ることになり、おふたりで山の話をなさるのでしようか。

十三年間の印象深いお付き合いに心から感謝申し上げます。ありがとうございます。そして、さようなら、高本さん。

(八月十八日インド・ガンゴトリ山群での登山を終え車にての帰路、落石にあい死亡。享年五十一歳。)

ミラ峠(五〇〇〇呎)へ。峠からは、東側尼東川(ネヤン川)を一路、八一鎮まで悪路を下る。下る事七時間、八一鎮に到着。八一鎮は緑豊かでとてもチベットとは思えない田舎町。ここでは、共産党の接待所に泊る。こぎれいな接待所だが、トイレ、風呂と設備はあるが使用不能である。

九月二十五日 本日は尼東川を一時間半程下りヤルツアンボの合流点を少し上流で左岸に渡る。ヤルツアンボ左岸を四時間程下った村、キーカルに到着。キーカル村ではBCより出迎に来てくれたローザンダワ総隊長の熱烈歓迎を受ける、この村よりBCまでは登りで三時間。時々、ナムチャバルワ峰が顔を見せ、高原を楽しく歩く。BCには六時着。BCでは重慶隊長より現在迄の進行状況、キャンプ建設、荷上げ、中国隊員が非常に頑張ってくれている事などの説明を受ける。他の隊員は現在C2で休養中とのこと。

九月二十六日 本日はC1に上る予定だったが、天候が悪く休養とする。東京をたつてから連日の移動だったので今日一日はのんびりBCの辺りを散策し秋の一日を楽しむ。

九月二十七日 本日も天気悪く、隊の方は本日より行動が始まるので、我々も下山する事に決める。昨日、今日と天気悪くナムチャバルワが顔を出さ

ないのは残念だ。隊員皆が非常に元気である事がなによりとBCを下る。たいた雨も降らずのんびりとキーカルへ。キーカルより来た路を陸路八一鎮へ。

八一鎮着六時三十分、共產党接待所泊。

九月二十八日 九時出発。来た路とまったく同じ路を帰る。下りが登りになるだけ、景色も悪路も同じ、しかし悪路になれたせいか差程つらくない。路は狭くなんとなく危険を感じていた矢先に尼東川途中、当パジェロとトラックが正面衝突、大事には至らなかったが、チベット人の事故処理には感心させられる。こんな事故があったにもかかわらずラサには予定通り六時半到着。本日、午前中JACナムチャバルワ隊隊長と副隊長が到着しているとのこと。夕食後、顔を合せ隊の現況を報告。

九月二十九日 予定を一日切りつめたため、ラサにての行動とする。青海街道を上り、ヤンパーチンを経て、ニンチェンタラ峰、チョモカンリ峰を見ながらチベット高原を楽しむ。今日一日はチベットに来てチベットらしい一日。非常に景色も素晴らしいチベットだった。

九月三十日 ラサを五時発。中国にきて連日の早朝発には、連日アタックの気分である。成都、錦江賓館泊。

十月一日 五時三十分発、SZ四一

四三便にて北京へ。来た時と同じ長富宮飯店泊。

十月二日 一五時二〇分 ANA便にて成田へ。

日程的には非常にきつかったが、かざられた時間で、ナムチャバルワBCを訪問し、登山隊長とも会合を持つ事が出来た事等良い結果と全隊員が悔いのない登山を出来ればと。(橋本清)



サハリン 樺太の山突岨山

五二九 麻生武治

北方領土の帰属が世間の話題になっている折柄、古い話で恐縮ではあるすが本会名誉会員であり岩登りの長老でもあった藤木久三さんのお供をして旧日本領の南樺太の突岨山(海拔約七〇〇呎)に一九三一年の二月厳寒を突いて登頂したことを僕(当年九十三歳)がぼけない内に談しておきます。

何故その時そんな時季に樺太に渡ったかといえ、全日本スキー連盟主催

の日本選手権大会が樺太の主都豊原市郊外の旭ヶ丘で行われ、ジャンプ競技の審判員であった私は北海道帝国大学卒のスキージャンプのOBの廣田戸七郎君と同行していたから。またその頃スキースポーツを通じて知合であった樺太庁農林部長の岡本さんとも同氏の前任地群馬県庁で学務部長をしておられた時、赤城山のジャンプ大会が縁で豊原で敬意を表しに役所を訪ねたら朝日新聞特派員の藤木さんとスキー連盟の役員だった僕に樺太鉄道の優待乗車券を発給して下さいだったので、得たり賢こしチャンスとばかりに当時の日露国境線(北緯五十度)に近い敷香を訪ねたのであった。

敷香の町は幌内川の右岸にあつて街の対岸には沿海州から渡ってきている土着民オロチョン、ギリヤーク族が三百頭ばかりの馴鹿の群と共に住みついてた。その衆長ウエノコロフさんを訪ねたら朝食の接待を受け、屋外は氷点下二十幾度でしたが衆長のヒュッテはペチカの温かさで、なごやかに露語の通訳つきで愉しい雰囲気につつまれた。さて敷香を辞して同じコースを新問駅から樺太鉄道豊原大泊へと帰路のみちすがら二等車内には薪ストーブが炊いてあり、車窓からは午後の太陽が輝きウトウト居眠がしたくなった。そんな頃合に鉄路は落葉松の森林を縫っ

て勾配線を徐行してたんで、冬枯の唐松林の向うに屹立する岩山が目についた。私は思わず藤木さんの顔をうかがった。藤木さんは大阪弁なまりで「いこか」と云われたからには、未知の山への好奇心も働き二人は無言のうちに次の停車駅近幌で降り、駅長に宿の有無を尋ねたら三百呎ほど離れた雑木林に囲まれた一軒宿近幌館を教えてくれた。

宿というより開拓小屋といった方がピッタリする。白樺の薪はフンダンにあつたから熟睡出来て、翌朝七時出発、スキーを履いて目指す山に向つた時の気温零下二十九度でした。麓の二きばかりは変哲もなく通過し、いよいよ山にかかるのだが積雪は少くスキーを岩蔭に置いて夏みちとおぼしき辺を、我無者羅に上へ上へ。前に駅長から借りた細引をまあ気休めにアンザイレンと

いった珍芸当、まずは大正デモクラシーの名残りと申しましよう。いよいよ稜線に出る所で先輩の確保で這昇った僕はギョ、反対側は屹立の壁オホツクの白波を覗下しただけで、サハリンの山も真冬の昼寝の夢か、旅の出来心か、ケ・セラセラ左様なら。

ナムチャ登山
山研改築
合同募金に協力を!

二四〇〇級級の山

南川金一

南アルプスの稲又山を最後に、二四〇〇級級の四十一山を登り終えた。本紙第五四二号(九〇年八月)に報告したように二五〇〇級以上二四三山をすでに登ってあるから、これで二四〇〇級以上の山を全部登ったことになる。

本会の『山日記』には二四〇〇級級の山が四十二載っているが、その中で「大日岳二四九八・〇」とあるのは三角点の標高であり、『日本の山岳標高』(国土地理院)では二五〇一級とされているので、二五〇〇級級になる。

また「釜石山二四〇〇」とあるのは釜谷山のことであろう。最近の二・五万図では二四一五級となっている。

二四〇〇級級となっても、その山域は二五〇〇級以上の山がある山域に類城三山が加わるくらいで、依然中部山岳に集中している。標高はやや低くなるものの、一般には登られることのない険しい山(赤岳、六百人)、活火山(焼岳、焼山)、山頂部まで森林に包まれた人気のない静かな山(奥茶臼山、青薙山)など個性のある山が少なくない。あまり登られることのない幾つかの山について簡単に記してみる。

・東餓鬼岳：東沢岳から鞍部に向かって踏み跡があるが、その通りに行くともなく猛烈な這松に出くわし進めなくなる。途中から左手の稜線に出るのがポイントになる。意外にも花崗岩が風化した白いザラザラの頂上だった。

川小屋裏の尾根を登った。上部では腰までのラッセルと倒木に苦しみながら展望のない頂上に達した。

稜線の残雪が無くなってしまいうのではないかと気を探んだ。槍ヶ岳山荘から千丈沢に下り、中山沢を登ってコル右手の地図上の赤岳を踏んでから赤岳最高点を経て西鎌尾根に向かい、槍ヶ岳山荘に戻った。西堀栄三郎元会長の「石橋をたたけば渡れない」は、蓋し名言である。

・加加森山：この山は光岳、池口岳を縦走する時に登られるくらいで、森林に覆われた真つ暗なピークをわざわざ訪ねて行く者はいないであろう。茶臼小屋から十時間半かけて長駆往復した。

・毛勝山・釜谷山：五月中旬、南又谷のテントから猫又谷左俣を登り、釜谷山を経て毛勝山を往復した。

一九九二年の夏にワルシャワを訪れる機会があり、本会の招請で一九八六年に来日したザワタ氏(Andrey Zawat)に再会した。日本のことを今でも楽しく思いだして、日本山岳会のみなさんによりしくとのことであつた。また、ザワタ氏をはじめとして、ポーランドのヒマラヤニスト達は、ナムチャバルワ登山に深い関心をもっておられ、ニュースが待ち遠しいようであつた。

・六百人：徳本峠から霞沢岳への道は近年随分明瞭になり一般ルート化した。しかし霞沢岳、六百人を結ぶ尾根を六百人の方に向かうと、初めのうちこそ踏み跡が認められるものの間もなく完全に消え、ひたすらの這松漕ぎとなる。這松の海を泳ぐようにコブを幾つか越えて最高地点に達した時には、夜行の疲れも加わりもはや来たルートに戻る気力は失せていた。どこかを強引に下らうと考えながら三角点ピークに達して、上高地へ下ると思われる踏み跡が見つかった時にはホッとした。

・伊谷山：南アルプス上河内岳から大井川に向かって落ちている尾根上の二四二三級ピークが伊谷山で、地図上には山名は入っていない。ウソッコ沢小屋脇急斜面を一〇〇級も登ると伊谷山からの南に下りている尾根の末端が明瞭になってくる。四月末、この尾根に取り付いた。二〇〇〇級辺りから残雪上を歩く。頂上からは樹間に上河内岳、聖岳が大きい。尾根伝いに上千枚山へ足を伸ばしてみたところ、頂上の三角点上と思われる場所に、測量用櫓が組まれており、その時に周囲を伐採したのか、残雪の南ア主脈が眼前に広がる素晴らしい展望であつた。

来日した人のなかで一番注目されているのはヴィレッキー(Krzysztof Wilecki)で、冬の八千級峰登山を含め八千級峰十四座全登頂を目指して今年もヒマラヤを登っている。

・小黒山：南アルプス主脈上の本谷山から派生して二兎山に至る尾根のピークである。ある年の暮れ、入沢井の上部の黒川林道にテントを張り、笹山に登って稜線伝いに小黒山を目指したが届かなかった。一週間程後、今度は塩

と、五十を過ぎたオッサンが単独でこの尾根を登るなど、狂気の沙汰と思われるかも知れない。硫黄岳は湯俣から往復したので赤岳が残ってしまった。

ザワタ氏にいわせるとポーランド

・赤岳：硫黄尾根に関する記録を読むと、五十を過ぎたオッサンが単独でこの尾根を登るなど、狂気の沙汰と思われるかも知れない。硫黄岳は湯俣から往復したので赤岳が残ってしまった。

昨年、今年と、春の連休は硫黄尾根を目指して北アに入ったが、昨年は新雪の腰までのラッセルと雪崩の危険で退却、今年も天候が悪く退却した。機会を窺っているうちに五月も末になり、

ザワタ氏にいわせるとポーランド

ポーランド岳人消息

沖 允人

一九九二年の夏にワルシャワを訪れる機会があり、本会の招請で一九八六年に来日したザワタ氏(Andrey Zawat)に再会した。日本のことを今でも楽しく思いだして、日本山岳会のみなさんによりしくとのことであつた。また、ザワタ氏をはじめとして、ポーランドのヒマラヤニスト達は、ナムチャバルワ登山に深い関心をもっておられ、ニュースが待ち遠しいようであつた。

来日した人のなかで一番注目されているのはヴィレッキー(Krzysztof Wilecki)で、冬の八千級峰登山を含め八千級峰十四座全登頂を目指して今年もヒマラヤを登っている。

きつてのヒマラヤニストとしては、ヴィレッキーに加え、来日したチヒ (Leszek Cichy) マナスルやアンナプルナ登山で活躍したハジェール (Artur Hajzer) ガシエヴィコ (Artur Gasiewicz) ロウ (Aleksandr Low) パウリコフスキ (Maciej Pawlikowski) などであるという。

ただ、最近のポーランドの経済状態から資金の調達が思うようにいかず、かつてのようにヒマラヤ登山を組織するのが困難であり、とくに、中国からのヒマラヤを狙いたいが金がかかりすぎるとのことであった。

ザワダ氏はもう六十三歳になっているが、それでも行くなら冬のヒマラヤを登りたいといっていた。

ポーランドの女性ヒマラヤニストは、ルトキウィッチ (Wanda Rutkiewicz) が逝ってしまい、後に続く者が伸び悩んでおり、力のある人はいるが前記の男性に匹敵するような人はこれからということであった。

ポーランドの山としては、チェコとの国境になっているタトラ山地があり、ザワダ氏と何回もヒマラヤに行ったことのあるドクター・ヤニック (Robert Janik) がタトラ山地の救助隊の医師として活動している。タトラ山地には岩山も多く、年間三十人位の死亡遭難があるという。

登山基地の街ザコパネにはチョー・オユーなどに登ったベルベッカー (Maciej Berbeka) が住んでいて、現在、男の子三人の親である。このところ自分で自宅を新築しているが、まじく、ヒマラヤから離れているが、まだまだヒマラヤ登山に意欲的である。

ザコパネには、ベテランクライマーであるコプカ氏が (Piotr Kopka) が Mountain Adventure 社という会社 (Drogado Dristolub, 34500, Zakopane, Tel (0-165) 66627) を始めてガイドをしている。

「岩と雪」の山岳年鑑や A A J のポーランド人の登山活動の常連寄稿者として知られているニッカ (J. Niska) 氏は六十歳半ばであるがますますお元気で、UIAA の海外登山ニース「Expe Dec」の編集を担当したり、ポーランドの山岳雑誌の一つである「Taternik」の編集兼発行をおこなっている。

ザワダ氏は、日本との引き続いての交流を熱心に希望されており、タトラ山地にある登山学校への日本山岳会会員の入学などを歓迎しておられる。この関心のあるかたは連絡をとられるとよいであろう。関係の住所は左記である。

Andrzej Zawada : 01523 Warszawa, ul. Smiaia, 35 m 2, Poland.
Association of Polish Alpine

Club : 00-010 Warszawa, ul. Sienkiewicza 12, Poland.

山里寿男「山のデッサン館」

オーブニング・セレモニー

会報「山」五六八号に既報の通り、この度「山のデッサン館」が完成したが、一般公開に先立ち、十月一日、勝沼市ぶどうの丘に新設された同館で、オーブニング・セレモニーが関係者多数出席のもと盛大に行われた。

本会からも山田会長の代理として松田副会長が出席した他、今井友之助氏はじめ地元山梨支部会員等多数が参加して祝意を表した。

同方面、山行の帰途など、便利な場所にあるので、是非立寄られるよう、お勧めします。

北アルプス常念岳の

こまぐさ

坂倉登喜子

昭和二十二年の夏に穂高岳周辺を歩き始め北アルプスのほとんどの山に登ったのに、なぜか常念岳だけが登り残した山だった。いつ登れるかと思っていたら、坂倉さんのビデオを撮りたいからと、クラブ会員の長田、入夏コンビに誘わ

れて、まず中高年向けプランで穂高のペンションに一泊、翌早朝一の沢入口まで車で入り、後発の森永会員を加えて登り始めた。常念小屋の山田恒男さんが松本から田中さんの息子さんと一緒に後から私達に追いついて同行して下さった。雪渓付近から道の修理を小屋のスタッフとされて、私達のために赤ペンキでルートをつけて下さった。

昔の谷ルートはなくなり巻道の新道を登り、最後の急坂を一汗すると急に前面が明るくひらけた。常念乗越の小屋は直ぐ目前で、お早いお着きだった。

翌日は強風と大雨で停滞と決めて、夕食の後、常念小屋の四季のテレビを見せて頂く。その後で途中で見つけたオノエランを山田さんが図鑑で調べて教えて下さった。私達は小屋のスタッフの紹介を受け、皆素晴らしいメンパーで、山田さんの人柄がうかがわれた。

二日目は雨がやみ早朝常念岳へ出発。風は強いがお天気は好天に向い、頂上でビールで乾杯、ビデオ撮影のためのアクションをしながら下り目的を達成した。小屋付近のコマクサの自生地案内して貰って、風のやむのを待ってシャッターを切りピンクの女王を撮りまくった。念願の歩き残した常念岳は八十二歳でやっと登ることができて、地図に赤線を入れ、平成四年と記録した。

十四度目のネパール

十四度目のネパール入り。インド航空機カトマンズに到着、ヤレヤレ。

九月十四日から山岳部現役はジリから歩き出し、ガートを経てクワンデリ南面BC入り。

私は途中をハシヨって、飛行機でルクラ入り。静岡の山男、山女を連れ、エベレストBCへ案内。トレッキングの途中、彼等の山馴れを見定めて、急ぎ下山。

カトマンズから中国機でチベット入りしてラサにきました。三日間薄い空気に馴らしてジープで、五〇〇〇呎峠、四つ程を乗り越え、ネパールに下る十日間の車の旅にです。途中、来年の山を探しにアチコチ枝道へ入ります。

山本朋三郎

(九月二十八日西藏拉萨より、編集部宛)

後から思い出したら

ウェストン

田畑真一

大正時代初期のこと、ウェストンは名前だけでなく、容貌までが一部の山

岳愛好者たちには知られていた。『山岳』第七年第三号(大正元年)には次の記事がある。

「尚本日同地より島々へ出づる間に一外人に出会候何だか写真にて見覚えある様思はれ候へ共誰なるやは後に至りて『ウルルター、ウェストン』氏なる事を承知致し候十七八年振の槍や上高地高原等変化せるに驚かるゝならんと存候。(八月十九日、浅間温泉西石川にて青木忠次郎)」

「ウルルター、ウェストン」の表記はともかくとして、関係の年譜(島田巽、川村宏、三井嘉雄、安江安宣の四氏「W・ウェストン年譜その3」、『山岳』第八十四年)により、前記についてはウェストンが槍ヶ岳へ向かう明治四十五年八月十九日のことではなかったかと思う。

大木操らも大正二年八月七日、偶然にもウェストン夫妻に出会う。大木の記録(「一高山岳会発足の由来」、『高山旅行部五十年』)には次の記事がある。

「彼方から、当時日本に三度目の来朝中のウェストン夫妻が、上高地の主、上条嘉門治を連れてやって来るのに偶然出合ったのである。かねてから、ウェストン氏は日本の山々の愛好者であり、明治二十五年八月槍ヶ岳登頂に成功し、日本アルプスの名付親であることは広く知られていたもので、この思い

もかけぬ奇遇に一同は大喜び、早速近寄って私達の山岳会のことや行程を告げ、同志と共に記念撮影することの許しを得て、河童橋の上で私がシャッターを切ったのがこの写真(田畑注、日本山岳会所蔵)なのである。」(田畑注、原文のまま)



図書
紹介

『日本旅行日記1』

アーネスト・サトウ
庄田元男 訳

北東アジアの片隅、西太平洋の一角に浮かぶ閉鎖的な島国は、百余年前、稀有な資質と能力とを持つ何人かの欧米人を迎えるという幸運に恵まれた。

本書は、その中のひとりで、幕末(文久二年・一八六二年)から明治十五年(一八八二年)までの通算十七年、その後一八九五年から約五年を日本で過ごしたアーネスト・サトウの、膨大な量の日記から日本での旅の部分を選び出した「旅日記」の抄訳である。

『一外交官の見た明治維新』(岩波文庫)によってこの傑出した人物から私たちは当時の日本の姿を教えられているが、またすでに、萩原延寿の朝日新聞連載「遠い崖」によってこの人の日本での実績をくわしく、興味深く迎えることができるが、今度の「旅日記」の訳出によって、それらの密度が一層つよまることになった。

そこには、道志川の流域、多摩川上流の山村、あるいは野呂川の流域、さらには越後・三国峠や針ノ木峠越えの道筋など、まさに「夜明け前」の日本の辺境の状況が描かれている。

鳥の声を採譜したり、植物を採集したり、その精力的で緻密な、そして鋭い観察は、卓越したこの人の能力を物語るとともに、当時の日本の姿も生き生きと伝わってきて、ページをくるのもどかしいほどに面白い。そして、八ヶ岳、妙高、農鳥岳・間ノ岳、金峰山など、日本にまだ「登山」という行為がなかった頃に未知・未見の山々に分け行つてゆく異邦人の探検的行動は実にみずみずしい。

一九八五年の暮れ、横浜開港資料館でのアーネスト・サトウ展で興味深い資料を見ることができた(会報四九〇号参照)が、今度のこの「旅日記」によって、この人と、「青い海に洗われて遠くそそりたつ崖」(サトウの抱い

た日本のイメージ」の国の往時の姿とが鮮明に浮かびあがってくる。

訳者がいうように、ここには「歴史・民俗、宗教、維新の変革、人物評価など幅広い分野にわたる鋭い指摘と分析」がある。その背景には「地政学的な取組みに熱心」だった大英帝国の当時の潮流があったにしても、このような人が近代の幕明けの日本にいたことは、私たちにとって幸せだった。

訳者による詳細な解説と補注とが理解をたすけてくれる。このような本を世に送り出してくれた出版社と訳者に感謝、そして乾杯。(2)も刊行済み) 平凡社(東洋文庫) 一九九二年一月発行 定価二七八一円(大森久雄)

ヒマラヤ冒険物語

クリス・ボニントン著

田口二郎訳

三月に香港から帰国して、久しぶりに茗溪堂に顔を出したら、坂本社長が「田口二郎さんの新しい翻訳本が出ましたよ」と教えてくれ、早速、本書を購入した。その時は、てっきり、ボニントンの新本だとばかり思っていたのだが、読みはじめてすぐに、旧著(邦訳『現代の冒険』上・下、岩波書店)の山の部分だけを抜き出して一書にし

〔自然保護随想〕

保護と保全

都市は農山村社会に比べ、自治意識も高く、自由であるうえ、教育、文化、医療などの生活基盤も整備され、安定した高収入を得る機会にも恵まれて、多くの人々をひきつける魅力をもっている。その反面、決定的な欠陥として自然が欠落してしまっている。都市住民が残り少い自然の保護を強く訴えるのも当然のことである。

他方、農山村社会に生きる人々は、近年まで食糧はもちろん、食糧生産を維持する肥料やその他の生活資材の多くを、山の自然に依存し、自給自足的な生活の中で、少しでも経済的に有利になるように、自然に働きかけ、利用して自然を管理してきた。現在の里の自然は、このような農民の生活をかけた汗水によって維持管理されてきた自然である。ここに生活する人々の内面から見た自然は、外面に映る美しい自然とは対象的に、生活を支えてきた生産の場であり、他に多くの収入の手段を持たず、所有する山の自然が、今後貴重な収入源であってほしいと強く願っている。そのことはまた、都会地なみの文化的な恩恵を享受し、そのための生活基盤の整備を期待することと裏腹になっている。

現在の山の自然は、木材自由化による材価の低迷、化石燃料の普及による薪炭材の経済的な価値の喪失、後継

者不足、嫁不足、農村人口の高齢化など、山の自然にかける願望とは逆に、山の経済的な期待は先行き全く不透明というのが、厳しい現実の姿である。枯死し、倒伏したアカマツが累々と山道を塞ぎ、下刈りや裾刈りもされずに放置され、いばらの茂った山林は、現在の山の厳しさを端的に物語っている。

自然保護は大切である。開発行為に対して保護を訴えることも重要である。しかし、開発の対象となる自然の多くは農山村社会に帰属しており、地元住民は開発賛成が普通である。都市住民と農山村住民の置かれている立場の違いから、これも当然の帰結といえよう。絶対に手をつけずに守らなければならない(保護)優れた自然な風景地もある。しかし、多くの場合、子々孫々まで、その自然の恩恵を受けられるような、上手な自然の利用のしかた(保全)を基本に据えていかなければ、矛盾は大きく広がるばかりである。

従来行われていた経済効率至上を修正し、未開発の技術も含め、保全技術を駆使し、きめの細い、賢明な自然の利用、開発を、都市、農山村を問わず国民的課題として取り組むときであろう。自然の保護にも保全にも莫大な経費を必要としている。従来方式の開発行為に對し上乗せされる経済的負担は大きい。この負担を誰がするか。自然保護の命題のもと、国民的なコンセンサスを得ることが、自然保護の最も近い道ではなからうか。

(田村説三)

たものであることに気がついた。何ともなく騙された気もしたが、旧著は、既に絶版になっていようだし、著者が登山家であるだけに、山だけで

なく、河、極地、海、空、洞窟、宇宙までを対象とした前著でも、山の部分がもっとも読みごたえがあったので、本書を独立させた意味は、よく理解で

きる。むしろ、旧著の意図を伝えるには、山に絞って、かえって、すっきりしたと言えるかもしれない。本書が取り上げられている登山は、

戦後の登山の発展を考える上で、大きなマイルストーンとなったと見られる七例である。登山の発展という場合に、著者の尺度は、探検的冒険とスポーツ的登山のふたつである。しかし、著者ボニントンの関心は、あくまでも、人間であり、著者の位置するところは、登山の現場、最前線である。それだけに、筆致はクールだが、迫力があり、臨場感がある。今や有名人となったボニントンに対する批判や妬みを聞くことも多いが、この本を読んでみると、ボニントンのノン・フィクション・ライターとしての才能が遺憾なく発揮されているように思われる。

このなかには、ヒマラヤやヨーロッパ・アルプスのさまざまなケースを通して、登山のスタイル、登山家の生き方、登山観、リーダーシップの問題、隊の組織をめぐる隊員間の協力、葛藤、あつれき、あるいは、事故、そして極限の状況における人間の強さと弱さ、等についての著書の観察や意見が随所に出てきて、著者自身の登山論として見ても面白い。

また、ティッヒのシェルパとの共同作業によるチョ・オユー初登頂、ボナッティのK2での挫折とそれをバネにしたプチ・ドリユの見事な単独登攀の成功、下り坂を自覚したヘルマン・プールの強烈な仲間への対抗意識がも

たらしたチョゴリザの悲劇、メスナーのひたむきなヒマラヤでの単独登山への献身とその背後にある、離れていった愛妻への愛情、等々、心を揺さぶるドラマも多い。

取り上げられた七例は、全て、一九八〇年までのものだが、著者は、本書のために寄せた新しい序文のなかで、その後の十年間の登山に触れながら、トモ・チェセンのジャヌー北壁とローツユ南壁の単独登攀を高く評価し、登山の将来に対する楽観論を提示している。しかし、同時に、「登山者が自然の制約の中で仕事をするのではなく、逆に彼らの意志を自然の上に押しつける」ものとして、冒険への本源的意欲に根ざしたとは言えない、スタント、あるいは、頭でつくられた登山が多くなっていることに疑問を投げかけ、かつ、ヒマラヤにおける環境問題にも言及している点は、注目される。

登山は変わったと言われるけれど、簡単にそんなことをいう前に本書をま

ず、熟読してみて欲しい。
一九九二年四月十五日 岩波書店刊
三三三頁 定価一一〇〇円(中島寛)

早池峰山の四季

高橋亭夫著

著者は、岩手県北上市に在住の本会会員であり、早池峰山に魅せられて四十年、五百回以上も登られたという。本書は、著者の早池峰山への登山歴と思入れが伝わってくる写真集である。鮮明でデフォルメのない素直な写真の一葉一葉が、四季の簡潔な文章と調和して、さわやかな写真に仕上がっており、早池峰の山容はもちろんのこと、足元の花や清流、ふと見上げた空や木々などの登山者が目にする風景を逃さずに捕えている。一頁ずつ繰っていくうちに、自分が歩いているような気持ちになるのはそのせいであろう。また季節のうつり変わりがみごとに捕られているのもすばらしく、冬から春、夏から秋と見ていくと、また最初の頁に戻ってもう一度頁を繰りたくなくなってしまう。一言で言えば、この山を愛する著者の素直な心が表現した早池峰山の讃歌である。

ハヤチネウスユキソウ以外の固有種が沢山入っているのが嬉しいし、巻末には二十四頁にわたって、写真では表現が困難な冬の厳しさを「冬山登山」としてきちんと入れている他、地質や動植物の説明、遠野物語や宮沢賢治と早池峰山の関わり等、最後に登山ルートが入っている本書は、写真集であると共に、早池峰山の総合的な手引き書ともなっている。

平成四年六月五日発行 岩手日報社
刊 総一一一頁 定価二二〇〇円
(江花俊和)

大自然に生きる人びと

写真で見る民族学入門

藤木高嶺著

当会員でもあるジャーナリストがペルー・アンデス遠征で登攀隊長をつとめたのをきっかけに登山隊や学術遠征隊のいわば従軍記者から、独自の計画と主体性を有した取材・ルポ・報道と自主的な山行・僻地行を重ねた三十年約二十ヶ所の世界の秘境訪問フィールドワークの集大成である。

第一部「自然の中の人間」では、一、極地に生きるカナダやアラスカエスキモー、二、高地に生きるペルーアンデスのインディオ、ネパールの山岳民族、チベット高原の民、豊かなブータン、ベトナム山地民、三、草原に生きる幻の遊牧民キルギス、モンゴル大草原の民、四、砂漠に生きるアラビア遊牧民、四、熱帯ジャングルに生きるニューギニア高地人、幻のコノイ族等写真と共に簡潔に紹介している。

第二部「さまざまな暮らし」では衣食住、労働、話す、習俗を守る、遊び、子供達、訪問したそれぞれの地

域の印象に残った代表的なものが写真付きで解説され、「フィールドワーク心得」では登山愛好家が海外登山やトレッキングに出かける時の楽しみ方の一つとして民族学的見方のあることを教えてくれている。

副題が示すとおり、まさに山岳僻地の「写真(カラーと白黒二五〇枚)で見る民族学入門」と言えよう。

一九九一年十月発行 くもん出版刊
一八七頁 定価三二〇〇円

(田中外交)

烏川の源流

みやま文庫刊

群馬県の自然、文化、歴史、産業、社会、経済などを掘り起こす研究誌として知られる「みやま文庫」から、『烏川の源流』が発刊された。昭和三十六年に『赤城(第一巻)』が発刊されて以来、今回が第一八巻となっている。

烏川は群馬県の西部、浅間隠山から鼻曲山へ延びる尾根付近を源流域とする川で、碓井川、鍋川を合わせ、高崎市の南で利根川へ合流している。この山域は浅間隠山、鼻曲山、角落山などが登山者に親しまれているが、烏川について知る人は少ないだろう。

地質的にみると、烏川源流は浅間山

と榛名山の間にあって、古期火山列と呼ばれているところで、標高一三〇〇(一七〇〇)の山に囲まれ、谷は深く険しい。倉淵村から烏川沿いに二度上峠を経て北軽井沢へ抜ける車道が通っている。アプローチは比較的便利だが、登山コースは主に軽井沢側や横川(霧積川)から通じていて、烏川方面はあまり開けていない。

本書には、烏川源流部の地質・動物・植物についての詳しい調査結果が纏められているが、この山域の沢についてはほとんど知られていないだけに興味深いものがある。鼻曲山直下の烏口と呼ばれる岩から滴り落ちる一滴から始まるところから烏川と呼ばれるようになったという謂れや、細かい枝沢の沢名なども記されており、とくに、植物については、源流部の各沢を詰めたから調査されていて、紀行風な文章から、険しい沢の様子を窺い知ることができる。この調査は昭和六〇(一九八五)年にかけて行われたもので、地元倉淵村山岳会の協力もあったという。

登山者に知られているいくつかの山についての解説もあるが、やや物足りない感じがする。本書の学術研究的な性格から言えばやむを得ないが、欲を言えば、もう少し対象の範囲を広げ、登山の視点に立った調査も加えて欲しかった。烏川流域に浅間山や妙義山の

名声に隠れて、登山者にはほとんど知られていない未知な山も数多くあり、沢についても、烏川の本流源流部だけでなく、支流の相間川や増田川、中川などもあまりよく知られていない。これは今後の課題として、地元山岳会などには是非期待したいものである。

小林二三雄、須藤志成幸、飯島静男、里見哲夫、片野光一、斎藤晋の各氏による共著。

平成三年三月三十日 みやま文庫刊
B6判 一八六頁 一五〇〇円

(岡田敏夫)

ライチョウ

生活と飼育への挑戦

大町山岳博物館編

鳥は私たち文明人にとって、ゲームの対象、食糧、羽根飾り、羽毛ぶとんやペットとしての関心がすべてと言ってよからう。ところで最近にわかに野鳥に関心が持たれるようになったのはなぜだろうか、鳥キチの私としては考えてみる。トキやアホウドリなどの絶滅の問題、都市周辺での野鳥の行動(大手町のビルのカルガモの親子など)がニュースになる、「バードウォッチング」なる新外来語の定着!

野鳥(に限らず昆虫や哺乳動物も同

資料寄付のお願い

登山の用具、記録等、整理する時考えて見て下さい。他に寄付する前に山岳会へ。捨てる前にも再考を。

資料委員会

じことなのだが)が、自然環境の変化を正直に伝えてくれることは確かだ。減っていく鳥、都市部へ移り住む種類など鳥の世界にも大きな変化が起きている。私たち山登り屋も大いに鳥に関心を持とう! ライチョウも生息地域がどんどんせばまり、個体数が減っていることが知られて久しい。本書は、生態を知ることにより絶滅をくい止めるよう大町山岳博物館の人達による飼育実験活動の報告である。爺ヶ岳周辺での四季を通じての観察に始まって、卵の採取、孵卵・育雛すると言う三十年間にわたるさまざまな試みが詳しく報告されている。

たくさんさんの写真も楽しいものだ。また、ライチョウと人のかかわりの歴史、外国種の紹介などさしずめ「ライチョウ百科」と言えよう。

この博物館の裏手の斜面にカモシカが放し飼いられていることも知られているが、ライチョウ飼育舎で身近かに

ライチョウを観察いただきたい。ピーコック風のおオライチョウ(ユーラシア種)も飼育されているのでぜひお立寄りいただきたい。

一九九二年二月十日発行 信濃毎日
新聞社刊 B 6判 二二二頁 定価
二五〇〇円 (松沢節夫)

立山連峰誌料を

読んでのおすすめ

石坂久忠

立山連峰誌料を開いてみると、貞観年間に至り「新川神社」(荒れ川の水を和げ給うの意)を尊称し安置、明治維新の後、さらに改めて雄山神社となった。社殿建立の由来は、今を去る一二〇〇年有余の昔、四十二代文武天皇の大宝元年(一三五三)二月十六日とある。加えて立山開山の経緯を示した中に、今まで語り伝えなかった事実を書いている。それは、…藤橋に至りしところ水勢強く、渉することも不可能、少時佇みし時、金色の猛猪現われ、郷(佐伯有頼)を背に負うて溪流を渉り…(この事は立山開山縁起に出てこない)は貴重な伝説で、有頼の不注意から逃した白羽の鷹は、劔嶽の刀尾天神(手力雄尊)であったと。

富山から立山(雄山)に至る記述は

正確そのものである。また、案内記も文華に富み、中でも玉泉院の建立と伝えられる室堂小屋(改築に決定、解体修理することになる)に泊った、W・シュタイニツァー(明治末期の信州の著者)の描写と対照的に一致、宿料は二十銭、仲語(案内人)の日当二十銭計四十銭で幾日も滞在可能、今の泊料と比較すると神の山の有り難さを感じる。単身登山の案内書としての正確さは純性で理屈家としては理屈抜きの書きぶりに敬意を表したい。当時の立山登拝道の自然の風情が生き生きとしている。浅地 倫著(立山権現)

また、大井信勝(号冷光)編『立山案内』に、愛国の志士を得んと欲せは必ず、愛山探勝の士を探る可し。に書き初まり、仁者は山を楽しむ、山は万人の仰き瞻るところにし…立山は該資格を具備するものとし即ち、立山は自然の博物館、自然の貴重な顔であり体である。万有の資料館である。とい

実に適切適格な自然案内書であり自然保護、環境保全の金字塔的書で、世人あまねく一読の要がある。

吉沢庄作の『立山』は立山々系の動植物研究の教科書である。水系に関しては、基本的に水系そのものを新しい角度から導き、氷河地形を精述し、カル地形の問題点をあげ、立山カルデラ

次代に残そう美しい山と溪

の起す惨事をして現在の建設省直轄砂防に対する要望の先駆となった点の始まりでもある。

冠松次郎著『立山群峯』は良き案内人によって成し遂げられたのだらうが、冠氏の山に対する意志の強き情熱、研究心が案内人をして一層忠実な山行とならしめた。『劔岳』も然りである。

劔岳に一等三角点設定の折り(柴崎芳太郎測量官)人夫とし参加せし宇治長次郎は劔岳の頂上を踏まなかったとされているが、それは仏教信者としての心情が長次郎をして許さなかったのであらう。次の機会からは登頂して世に長次郎の存在を出したのであった。山案内の達人的ガイドは冠さんと親交を深め、劔岳をも現代的に世の注目するところとなった。そして現在のアルピニストのメッカとしての価値あらしめた。

立山権現、立山案内、立山、立山群峯、劔岳、の五書の合本が覆刻され、新興出版社の林章氏の労苦に感謝し敬意を示し、あらためて自然の立山連山を歩いてみたい。また、広瀬誠氏の懇切な解説は「立山を知る上で基本的参考書である」ことを加えて岳人諸兄の

山名	山岳名	三角点			測量年度	測量掛	標高 m
		等級	点名	所在地			
赤石	塩見岳	II	塩見山	長野、上伊那、伊那里村、浦	観測点 標高観測	明治35 家中虎之助	3046.86
	仙丈ヶ岳 (前岳)	II	前岳	" " " "	観測点 標高観測	明治35 山本米三郎	3032.71
飛驒 (日本アルプス)	乗鞍岳	I	乗鞍岳	" 南安曇、安曇村、大野川	観測点 標高観測	明治27 28 29 30 31 32 館古田 深彦盛作 政茂	3026.25
	聖岳	独立 標高	—	静岡、安部、井川村、田代所在 (Ⅲ) 聖ノ岳ノ西南約600m			3011.
赤石	劔岳	IV	劔岳	富山、中新川、立山村、芦峯寺	観測点 標高観測	明治40 柴崎芳太郎	2998.
	立山	I	立山	" " " "	観測点 標高観測	明治27 28 29 30 31 32 33 館古田 深彦盛作 田田和 三郎	2991.96
	水晶山 (黒岳)	III	水晶山	" 上新川、大山村、有峰	観測点 標高観測	明治39 佐々木 戸次郎	2977.70

座右の一冊とすべき書である。併せて新興出版社の『黒部峡谷誌料』を精読願えれば、自づと飛驒山脈の中の立山連峰の存在が明らかになり、立山の偉大な自然資料の肉付けが貴重なものと信ずるものである。

報告

青年部阿尼瑪卿峰

遠征報告

日本山岳会青年部
阿尼瑪卿登山隊

隊長 熊崎和宏

阿尼瑪卿峰(アムネマチン・六二八二呎)というところ、ご年配の方にはかつて『幻の九〇〇〇呎峰』と呼ばれた山としてよくご存じなのではないかと思いますが、名前が有名なわりにその実態は意外と知られていないというのが事実であったと思います。そのようなことも今年で三年目を迎えた青年部の海外登山の目標として、私がこの山を選んだ理由の一つでした。

七月十九日、青年部や各隊員の出身母体の山岳部現役あるいは女房(新婚の)・恋人といった方々のお見送りを受けて成田を出発した我々は北京でCMAとの打合せ等をした後、二十一日空路で蘭州經由西寧に入りました。青海省の省都西寧からは四輪駆動車で青蔵公路を一路南に向い、途中花石峡というところから阿尼瑪卿山麓に入っています。距離にして約七〇〇キロの道程ですが、途中四五〇〇呎以上の峠をいくつも越え、また四〇〇〇呎近い街に三泊滞りますので、それ自体

は結構きついのですが、BC入りのための高度順化として考えると非常に都合が良かったと思います。

途中車窓から見える景色を見て最も驚いたことは、山間部の僻村にまで衛星TV放送受信用のパラボラアンテナがそこかしこに立っていたことです。

中国では元々食物は豊富にあるという印象を持っていましたが、二年前に行った旧ソ連(パミールキャンプ)と比べて、同じ共產主義超大国でありながら、物の豊かさのあまりの違いには今更ながら驚き禁じ得なかったのです。

青海省の山はこの時期モンスーンの影響を受けるのではという懸念が出發前から若干頭の中にあつたのですが、案の定BC入りまでのキャラバンの間は毎日曇空か雨でした。それは、四四〇〇呎のBC周辺にすら這松のような低灌木が生えていることが降水量の多さを裏付けており、納得出来たことでした。しかし、BC入り後上部行動を始めてからは毎日嘘のように空が晴上がり、順調に荷上げ等計画を消化していききました。

四四〇〇呎のBCから上部は、五〇〇〇呎でやっと氷河に降り立つまで、ずっと高山植物の咲き乱れる古いモレーン上の草地を行います。

五一〇〇呎に設営したC1までは氷河も比較的安定していましたが、日中の気温が高すぎるためC1上部はクレバスだらけで、セラックの崩壊も激しく、初登の上越ルートが使えず、主稜線から真直ぐC1におりている岩稜(といっても予想では雪稜の筈だった)にフィックスロープをベタ張りしながらルートを開拓していききましたが、五五〇〇呎のピークに達したところで全てのフィックスを使いきり、その先さらに懸垂下降の必要なピッチからナイフリッジへと続いていたため、後すべてスタックカットによる荷上げ・アタックそして下山というのは到底無理と考え、登頂断念の判断をせざるをえませんでした。

隊長として安全を第一に考えるのは当然のことですが、計画段階での予測を誤ったことは私の責任であり、将来性のある若いメンバーたちに実績を作つてあげられなかったことを深く反省しお詫びしたい気持ちです。

しかし、阿尼瑪卿峰は十分な装備さえあれば決して登れない山ではなく、適度な高度と適度な難易度を持ち、今後の青年部海外登山計画の目標の一つとして非常に良い山なのではないかと思っています。今回、メンバーはそれぞれに出身母体の大学の異なる六名でしたが、チームワークが大変良く、また出

来れば同じメンバーで再挑戦したいとすら思います。

最後に今回の登山に際しまして大変お世話になりました青年部・高所登山委員会をはじめとする日本山岳会員の皆様と中国登山協会および青海省登山協会の皆様に深く感謝させていただきます。き取敢えずの報告とさせていただきます。

一九九二・九・一二

サタデープラン

「親子ハイキング」の報告

このハイキングは、公立小・中学校がはじめて土曜休日となった記念事業として行われたものなのですが、他にスケジュールがあるのか小・中学生にとって山登りはいまいち人気がないようでした。しかし親子で休日を有意義に楽しく過ごすにはまず親が心底楽しくなければいけません、親がつまらないはずで、親子ハイキング大賛成です。(勝手な親?)

神無梅雨とかで例年この九月というのはぐずついた雨天の日が多いのですが、今年は何年ぶりの雨無し天気が続いており、山屋には幸運の日和です。ただ秋味の茸には縁遠くまったくお顔



高柄山山頂にて

を拝見できないのも少し寂しいもので

すが、好天に恵まれた土曜日の朝、中央線各駅停車下りは高校生の通学時間とラップしてにぎやかなアプローチでした。総勢十二名四方津駅に集合予定より三十分遅れで登山活動開始、千足の部落をめざす、こんなところにといったところに小さな集落があり五万分の一地図の正確さに感心、ここより本格的な急登で手入れの行き届いた杉林の中を歩き千足峠を経て雑木の尾根道を高柄山山頂へ。相模湖方面、南面丹沢方面に景色が開けていてまことに

駆けへ。

四方津駅(九・〇〇)↓千足部落(九・四〇)↓(九・五〇)↓高柄山(一一・二〇)↓二(一〇五)↓大地峠(一二・五五)↓一三・〇五)↓四方津駅着(一五・二五)
参加者 継松義彰、継松美穂、小倉茂暉、川善市、小松原一郎、坂本正智、吉川隆士、上栗千鶴、遠藤紀美子、前田美千彦、林栄二 (継松義彰)

名誉会員を囲む会

ここ数年、毎年五月の総会に先立って開かれていたが、今年は諸般の事情により、去る九月十一日(金)、正午より、本会会議室で開催された。

出席者は、佐々、堀田、田口、織内、望月、渡辺各名誉会員の他、副会長を歴任された大塚、村木両評議員、鳴原、西村、橋本の各常任評議員、小倉常務理事(事務局)の十六名。

今回はとくに議題を設けず、現在会がかかえている諸問題につき、名誉会員各位からご意見を拝聴する形ですめられた。

まず話題提供として山田会長より、現在実施中のナムチャバルワ登山と山研改築の二大プロジェクトについて説明があり、次いで藤平副会長より、自然保護、国際化(外国からの日本の山

にこられる登山者の急増に対する問題)等についての説明があったが、今回は、これら自然保護の問題に話題が集中した。

これに対し名誉会員側からはそれぞれ次のような意見が述べられた。

本会は、自然保護運動については、創立当初より、常にリーダーシップをとってきた経緯はあるが、昨今は、地球全体の問題にまで発展し、多くの団体が活動するようになってきている。JACが、いろいろこれらの団体と一緒に活動して運動していたのでは、山に登れなくなってしまう。本会としてのやるべき内容をしぼり、方針を明確にしていった方がよい。(田口)

自然環境保全については従来より、熱心に行われているが、文化面の環境保全についても、目を向けるべきではないか。反自然のものはこわれる。(渡辺)

行動規範としてのフィールド・マナー・ノートの活用(田口)等貴重なアドバイスを頂いた。

今回は時間の関係もあって、登山の多様化、国際化、高齢化、名誉会員制度の在り方等にまで話題は及ばなかったが、大変有意義な会であった。

最後に新たに完成する山研への期待と、ナムチャバルワ登山の安全と成功を祈念して十五時三十分閉会した。

報告 北海道春期山行

増毛山地「黄金山」

北海道支部

半年にも及ぶ長かった雪の季節もようやく終わりを告げ、四月十七日の支部総会で、本年の支部山行が採択承認された。早速支部会員にご案内して、九二年春期山行を行うこととなった。

増毛山地の黄金山は、標高七三九メートルの低山であるが、孤高の岩峰で日本海側から富士山の形に見えるところから浜益富士とも言われている。

まず、土曜日から行動できる一泊組と、翌日の日帰り組となり、合わせて十三名の参加となった。一泊組には遙々函館の横内氏、札幌の芳賀氏・岸氏と私が村営浜益温泉の駐車場に集まり、入浴の後隣のパーキングパークの芝生の上にテントを張り、バーベキューパーティとなり、恒例のお天気まつりとなった。

翌朝山行担当の大久保氏がリーダーとなって、登山口の駐車場にやって来た。しかし、駐車場は早くから来ている他の登山者の車でいっぱいだった。午前九時出発、途中最終水場で一休みし、あとは急峻な新道コースを進む。

ナムチャバルワ峰登山 上高地山岳研究所改築

合同募金に協力しましょう！

登山道の脇には、当初川ぞいにヤチブキと言われるエゾノリュウキンカ、傾斜地にはカタクリの群落、アイヌネギと言われるギョウジャニンニクが辺り一面に生い茂っている。下山時に採取することにして頂上に急ぐ、十時五十分全員無事登頂、早速冷えたビールで乾杯すると、途中の肝冷やしの岩場の緊張も忘れ去った。山頂での見晴らしは一〇〇％、北に暑寒別の山々がまだ白銀に覆われ、東に遠く夕張・芦別、南に余市・札幌の山々に遠く積丹の山も霞んでいいる。

次々に後続の登山者で、狭い頂上はいっぱいになり、早い昼食を済ませ場所を譲って十一時三十分下山開始。途中予定通り山菜採取となり、とくに女性軍が意欲的なこと、両手の袋に入り切れないほどの収穫、聞くと会社の仲間が山菜のお土産を待っているとのこと。午後一時下山し、現地解散となるが、ほとんどの人は、浜益温泉に入って夕刻帰宅した。

参加者 赤石喜恵子、大久保五郎、小田隆治、小田武、小野肇、岸恒方、酒

会務報告

九月定例理事会

九月十日(木)十八時半

場所 本会会議室

出席者 山田会長、藤平・松田副会長、小倉(茂)、大森、大倉、神崎、入澤、伊丹、山本、石橋、小倉(厚)、村井、穴田、山口、片岡、関口、南川各理事、橋本、湯浅、斎藤各常任評議員、中島監事

(委任) 藤井理事、西村常任評議員、飯野監事

◇議事

(審議事項)

- 一、ナムチャバルワ登山の件(松田)
- ・九月二日 登山隊、報道隊成田出発、その後も予定通り行動している。
- ・九月二十一日 橋本名誉総隊長出発
- 橋本(清)、湯浅、長尾同行
- ・九月二十三日 山田総隊長、斎藤総

副隊長出発。支援隊については関口理事以下八、九名の予定。承認

二、気象ファックシミリ購入について(大森)

ナムチャバルワ気象データ収集に必要な機器として借用の方向で交渉していたが、特別価格で購入する必要がある。三十五万円でJACの備品として購入したい。承認

三、山研について(小倉)

九月三日上棟式を現地で行った。藤平委員長、松田副会長を含め山研委員十五名参加。松本土建田内副社長外十五名。

四、農大ガッシャブルムII峰(一九九三年)登山隊の件(村井)

一九九三年の登山につき都岳連への推薦状の依頼があった。承認

五、シルバートール、ダウラギリ主峰(一九九四年)登山隊の件(神崎)

一九九四年の登山につき都岳連への推薦状の依頼があった。承認

六、事務室用パソコン更新について(松田、大倉)

現在使用中のパソコンは導入以来六年半を経過し、容量的に限界にきている。会員の大増強に対応できなくなっている。会員のソフトの手直しを含め機器を更新したい。新機種導入 一九九二年十月予定。承認

七、「第一回青森ウェストン祭」後援

について(小倉)

青森県新郷村より「ウェストン顕彰碑除幕前祭」につき後援の依頼があった。日時 十月十日(土)九時～十一時 会場 三戸郡新郷村戸来家顕彰碑前 承認

(事後承認) 八月三日臨時常務理事承認事項

一、東大カラコラム、マッシャブルム登山隊(一九九三年)について(小倉)

一九九三年の登山につき都岳連への推薦状の依頼があった。

二、長野放送NBSスペシャル92「ウオルターウエストン槍ヶ岳への道」協力依頼について(小倉)

平成四年八月二十九日十二時放送の番組につきJAC所有の写真、手紙の資料撮影および山田会長のコメント録音につき協力した。

(報告事項)

一、周恩来展レセプションが九月二十二日開催されるのでJACとして小倉(茂)が出席する。

二、山里寿男会員(六二八六番)「山のデッサン館」が十月一日開館されるので松田副会長が会長代理で出席する。

三、田部井淳子会員(六三三九番)が九月一日「スポーツ功労者」表彰を文部大臣より受章した。

四、「上高地浄化センター」竣工式が九月二十八日上高地で行われるので小倉(茂)が出席する。

五、合同募金について(九月十日現在)(石橋)

会員 一七三三人、二八、一〇七、一〇九円 女性懇談会 六、一九七、九七九円 企業一六七団体(未収を含む) 四七、七七六、〇〇〇円

六、海外登山基金について(大倉)
本年度海外登山基金は金利の低下により総額三〇〇万円で考えている。
七、ナムチャバルワ壮行会会計報告(大倉)

八月二十一日に私学会館で実施。剰余金については本会の雑収入に計上。

〔各委員会報告〕

総務委員会 ①会員名簿作成について
年次晩餐会までに間に合うよう作成する。②年次晩餐会について 十二月五日(土)於新高輪プリンス。会費一五〇〇〇円になる予定。③全国支部大会「英彦山の集い」について 十月三十一日、十一月一日、英彦山で福岡支部担当で開催。

海外委員会 ①UIAA松本大会について 十月十日松本市松本文化会館で開催。十日は公開シンポジウム、十一日は上高地散策。②HATJ青少年国際交流清掃登山「富士山/立山国際

キャンプ」八月二十〇二十七日。③剣三ノ窓清掃登山八月二十九三十日 JAC富山支部五人と労山の会員と協力してヘリで約四〇〇〇キのゴミを回収した。

青年部 七月二十二日前理事早坂氏の追悼会 於私学会館 七月二十日南極探検隊グリーンランド合宿を終了し帰国 八月六日南極探検隊グリーンランド合宿報告会 八月二十日第三次海外登山アムネマチン峰隊帰国。雪の状態が悪く五八〇〇地点にて断念 九月三日横浜市大トムール峰報告会

女性懇談会 八月二十九日全国集會於御岳山 女性登山史をテーマに全国集會開催、参加者四十六名。御岳山宿坊山楽荘に宿泊し三十日四コースに別れ御岳周辺の山行。九月五日ビールパーティー 於ルーム 望月達夫氏のショートスピーチ、参加者六十二名。・HCサリーンさんを支援する会より募金お礼 山岳会員の皆様のご協力により目下のところ一三〇万円程になり十月サリーンさんの来日の折、お渡しする予定。

自然保護委員会 ①ライオンズクラブに中村委員が提案し、国際委員会第八リージョンで「高尾山の自然観察と山をきれいにする活動」をやることになり、これに協力することになった。こ

れにより当会の自然保護活動に約五十万円の寄付をしてもらえる。日程は十一月八日の予定。②自然保護シンポジウムを来年二、三月に行う。

科学委員会 マッキンリーの経験がナムチャバルワの気象予報の準備に生きた。C3の気象ロボットのデーターをBCで無線で受ける機器の製作が発売に間にあった。出発後電池容量がギリギリであることが分かった。対策を検討中。

集委員会 ①文部省より要請のサタデープラン、高柄山親子ハイキングは九月十二日(土)総務委集會委共催の形で実施の予定。②土曜会が中心となり還暦の会を十一月七日(土)八日(日)両日四尾連湖付近で実施する。③講演会「森を読む」は東大助教授大場秀章先生により十月十四日(水)と十一月十一日(水)の両日、PM六・四五〜九・〇〇 於JACルーム。④本年最後の忘年会山行は十二月十三日(日)に山梨県都留市の二十六夜山で実施することに決定。⑤来年一月のスキー懇親山行は一月十五日(金・祝)一月十六日(土)一月十七日(日)の二泊三日で八方尾根八方池山荘で実施する予定(五十人分確保)。

資料委員会 十一月七日(土)午後、海野治良氏の講演会を予定(登山用具の変遷等について)。

フィルムビデオ委員会 十一月六日(金)ビデオ映写会予定(当会ルーム)。《入会申し込み》宮崎専輔他四十五名(復活二名を含む)を承認

次回理事会十月八日(木)PM六・三〇
場所 日本山岳会会議室

ルーム日誌

(9月)

1日 アルパインスケッチクラブ
3日 青年部、女性懇談会
7日 総務委員会
8日 自然保護委員会幹事会、図書管理委員会
9日 集委員会
10日 常務理事会、理事会
11日 図書委員会、常任評議員会
16日 フィルムビデオ委員会、山研委員会、三水会
17日 女性懇談会、科学委員会
21日 総務委員会、図書委員会、資料委員会
22日 自然保護委員会、指導委員会
24日 フォトビデオクラブ、青年部
28日 資料委員会、学生部委員会
9月来室者428名

会員異動
姓名変更
後藤明美↓田崎明美

9月

佐藤皆子、熊崎皆子

退会

大蝶達男(六五四九) 7・29

伊藤英三郎(六二九六) 7・24

物故

柴田均二(二六五五) 10・1

山研・ナムチャ合同募金応募状況

(十月七日現在)

(六・二〇) 一力英夫、(六〇) 秀島敏

(計十二口)、(五〇) 萩田實、(四〇) 戸

屋正俊、(三〇) 小崎尚、(二〇) 高岸徹、

高澤佐恵子、清水朝一、佐藤征郎、奥

田英一郎、政嘉秀一、井上晃、重松保

宏、菲沢庸昭、小林直人(京都支部)、

高野昭吾、大谷優、松村多四郎、川崎

精雄、吉沢一郎(計八口)、大貫良夫、

大津陸郎、永島賢司、上村秀雄、本間

修、広谷精啓、袖山要一、鈴木鎮夫、

松本宏、匿名会員、松本吉正、中山繁、

久米睦夫、岩切岑泰、久保田保雄、今

井喜美子(計四口)、柴田初子、豊島洋

一、桜井宗、遠藤慎一、田辺正英、赤

沼節、戸塚守夫、山本聖二、八巻寿、

河西弥一、池戸誠二郎、林茂、葉袋興

児、樋口幸利、松本明子、若松庄三、

日野正紀、栗村明信、宮本喬、中島富

雄、木村康雄、ユージン・リー、丹生

光明、(一〇) 石橋文夫(計五口)、岩崎

英宣、内田嘉弘、木之下繁、笹田諭吉、

阿部恒夫、岩崎美智子、青柳安昭、松

尾寿、飯田勝之、岩田三郎、三水会野

美の市、花井馨(福島支部)、山田健二、

西野喜与衛、奥山善一、三浦繁司、吉

川仁、山本恵志郎、田内正一、樋口光

久、白木貞次、下田泰義、菊池修身、

中村昭、近藤浩之、木村カズミ、田代

妙子、渡辺健二、木村操一、杉山善三

(累計一千八百一十一名、五千七百六十

七・六〇、二千八百九十万八千二百二十

九円)



3234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●平成四年度年次晩餐会のお知らせ

恒例の年次晩餐会を左記要領で行い
ます。

日時 平成四年十二月五日(土曜日)

開宴 午後六時

会場 新高輪プリンスホテル

国際パミール館大宴会場「北辰」

会費 一五〇〇〇円

(特別催し)

資料委員会による

加賀正太郎氏寄贈の「蘭花譜」

榎谷徹蔵氏の「絵画」

を午後四時三〇分より展示します。

(懇親山行)

十二月六日(日曜日)陣馬山集中登

山と山頂での「餅つき」を予定してい

ます。

詳細は晩餐会準備委員会までご連絡

下さい。

●八方尾根懇親スキー山行

恒例の八方尾根懇親スキー山行を左
記のように行います。今回も楽しい会
にしたいと思しますので、ふるってご
参加下さい。

日時 一月十五日(金)より十七日(日)

(二泊三日)

場所 八方尾根第一ケルン

八方池山荘に宿泊

費用 一万九千円(交通費昼食費別)

申込み JAC事務局まで氏名、会員

番号、住所、電話明記の上ハガ

キにて申込みのこと、詳細を送

ります。

人数 五十名まで

集委会員会(担当小松原)

●忘年会のお知らせ

日時 十二月十二日(土) 五時半

場所 JAC集委会

会費 二千元

例年の通り忘年会を開催致します。

多数お集り下さい。今年はプレゼント

を用意致しております。

総務・集会・女性懇談会共催

●忘年山行、'92

道志二十六夜山(二九七八峰)

日時 平成四年十二月十三日(日)

集合・時間 富士急都留市駅 午前八

時二十五分

出発 月夜野行バス 午前八時三十分

《参考》新宿六時二十二分(甲府河

口湖行)、八王子七時三分、大月七

時五十八分、富士急八時八分、都留

市八時二十三分

地形図 都留(二万五千分の二)

順路 道坂峠⇨今倉山(御座入山)⇨

松山⇨二十六夜山⇨引ノ田(あ

かさか駅歩いて四十分)

携帯品 防寒衣、手袋、懐電等

食物 昼食、副食物、飲物(アルコー

ル類含まない)

費用 交通費自弁 参加費八〇〇円

(保、写等)

申込 山岳会事務局 十二月二日まで

にハガキで

担当 集委会員会 高澤英雄

☎〇四五・一五三一・七五二三

《静かなる山》ご参照下さい》

書籍・雑誌 受入報告 1992年8月

著 者	書 名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
山本鉾太郎監修	日本の「富士」たち ふるさとの山・思い出の山	A 5/143 p.	講談社	1992	井澤信久氏寄贈
坂倉登喜子・梅野淑子	日本女性登山史	A 5/153 p./+28 p.	大月書店	1992	発行所寄贈
アンタークティックワーク	カラヒ・ヌナ合宿報告書	B 5/78 p.	探検隊事務局	1992	"
南極点探検隊					
孫慶錫	山又山	A 5/301 p.	秀文出版社	1991	著者寄贈
日本山岳会京都支部	ヒンズークシュの名峰 TIRICH MIR (7708 m) 聖域の巨峰	A 4 変型/163 p.	日本山岳会京都支部	1992	斎藤惇生氏寄贈
	喬戈里峰北西壁初登攀の記録	A 4/63p.	登山実行委員会	1991	植木知司氏寄贈
奥 淳一追悼編集委員会	奥 淳一追悼集 山と空—憶れと実践と	B 5/205 p.	奥富久枝	1992	発行所寄贈
McLewin Will	In Monte Viso's Horizon	24×17/255 p.	The Ernest	1991	"
渡辺立男	薄雪草	四六変型/231 p.	渡辺立男		著者寄贈

スポーツ振興基金

平成五年度「国際的に卓越したスポーツ活動」募集(予告)について

〔助成対象〕

スポーツの分野において国際的に価値が高く、いわば人類の能力の極限に挑むなど国民に夢を与え、世界のスポーツ史に足跡を残すようなスポーツの活動で、平成五年四月一日〜平成六年三月三十一日の期間に行なわれるものを助成の対象とします。

例えば、エベレスト登頂における新ルートの開拓、ヨットによる単独の世界一周、遠泳による海峡横断の初達成などです。

〔資格者〕

右記のスポーツ活動を行なうためのチームまたは個人で、当該スポーツ活動についてその成功が相当程度見込まれる専門的な知識、高度の技術、経験等を有する者であること。

応募受付期間…平成五年一月中旬〜平成五年二月中旬

問い合わせ先…日本体育・学校健康センター

〒105 東京都港区虎の門二一五八
サンブリヂ虎の門ビル四階

☎ 03-3592-0136

◎第二回アルパインスケッチクラブ展のおしらせ

アルパインスケッチクラブでは第二回クラブ展を渋谷の東京電力電気温水器センターギャラリー(昨年と同ギャラリー)において、一月二十一日から二十六日まで開催いたします。

スケッチ山行等による一年間の作品をご高覧下さるよう、多数の皆様のご来場をお待ちしております。

アルパインスケッチクラブ

.....

編集後記 ◆十月の理事会で承認されて、奈良原町子さん(六四九三番)が会報編集委員になりました。よろしくご声援のほどお願い致します。◆この会報がとどく頃はナムチャ登山は成否が決まっています。つくづく月刊紙の限界を感じます。(A・O)

平成四年十一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法団 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(326) 四四三三

振替口座 東京三二四八二九番

東京都港区赤坂一三二六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社技報堂